

女子大学

企画課管理用 研 一 A 一 1

推進主体	国際文化交流学部 【旧 国際学研究所】
責任者	国際文化交流学部長 【旧 国際学研究所所長】

分類			実施計画	開始年度	完了年度	将来的な継続
研	一	A	グローバルな研究交流の推進	令和 4 年度	令和 9 年度	あり(予定)

① 目的・内容
<p>本学は小規模ながら世界15ヵ国・地域に協定校を持ち、研究所レベルでもカナダ・中国・韓国に研究協定機関を有している。国際学研究所は、こうした多様な協定校を持つ本学の強みを活かし、定期的な国際フォーラム開催と英文雑誌の発行を通して積極的にグローバルな研究交流を行い、研究の国際化を推し進める。</p> <p>海外から実績ある研究者・実務家を招き公開フォーラムを開催することで、教員のみならず多くの学生に国際水準の研究に外国語で触れる機会を提供する。フォーラムのテーマは、本学におけるリベラルアーツ教育やカリキュラムの国際化を俯瞰しつつ、時宜にかなった企画を行う。</p> <p>また研究交流のプラットフォームとなるのは、研究所で毎年発行している英文学術誌、<i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> であり、これまでも欧米およびアジア圏の協定校などから幅広い英語論文が投稿されている。今後、フォーラム等に関連した特集を組むと同時に、より多くの本学教員が研究を英語論文として掲載することをサポートすることによって、協定校の研究者とのグローバルな研究交流を充実させる。</p>

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。
定期的に国際フォーラムの企画開催を行う。英文学術誌をプラットフォームとした研究交流に関しては、3年間で所属教員の1割程度が研究論文を <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> に掲載できるようにサポートすることを目指す。

③ ロードマップ							
年度	令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
予定		フォーラム実施準備					
			フォーラム開催				
		英語論文投稿依頼及び査読・翻訳等作業		フォーラム通常業務化			
			英文雑誌発行		英文雑誌通常業務化		

④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。							
指標の名称		指標の定義(計算式/説明)					
1	直近	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度
目標							
実績							
2	直近	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度
目標							
実績							

⑤ 実施計画／実施報告		
年度	実施計画	実施報告／今後の課題
令和4年度 (2022年度)	海外から実績ある研究者・実務家を招いて公開フォーラムを開催し(実施形態については流行している感染症などの状況を総合的に勘案しつつ適宜決定する)、教員のみならず多くの学生に国際水準の研究に外国語で触れる機会を提供する。また同フォーラムの内容については研究所で発行する英文学術誌、 <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> に関連論文を掲載するか、特集を組むことによって、公開フォーラムの内容を軸にしつつ、グローバルな研究交流を行う。	実施計画に基づき、予定どおり進行した。具体的には、フォーラム:「ヨーロッパにおける日本研究の最前線」を開催した。ヨーロッパの中でも日本研究の水準の高い、スイスのジュネーブ大学文学部東アジア研究学科より研究者3名を招き、最新の研究成果を発表いただいた。本成果については、 <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> への掲載に向け、編集が進んでいる。
令和5年度 (2023年度)	台湾、大陸中国あるいは韓国から研究者を2名招き、感染症の状況も判断しながら春学期中にフォーラム「変動する東アジアの国際環境」を開催する。招聘する研究者は、感染症の状況と政治的状況を勘案しながら決定する。このような国際フォーラムの開催を通して教員のみならず多くの学生に国際水準の研究に触れ、共に東アジアの未来について考える機会を提供する。その成果は、 <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> を通して公開する予定である。	実施計画に基づき、予定どおり進行した。中国の政治状況に配慮しテーマを日中交流に焦点を絞り、フォーラム:「日中交流の歴史と未来」を開催した。北京の清華大学、上海の東華大学から研究者2名を招き、さらに前駐中国全権大使の横井裕氏を招いて、当該テーマについて発表していただいた。本成果および学生の感想などについては、国際学研究所のHPに掲載されている。また <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> への掲載に向け、編集が進んでいる。
令和6年度 (2024年度)	本学と交流が深いブリティッシュ・コロンビア大学からC・ラフィン教授を招き、日本文学に関する国際フォーラムを開催する。教員・学生も参加するフォーラムにおいて、日本文学に関する欧米の研究状況を紹介していただくことで、より相対的な視点から日本文学について考察を深め、議論する機会を提供する。このような機会とは、欧米研究および東アジア研究を志す学生双方にとっても知的刺激を与えられ考えられる。その成果は、 <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> を通して公開する予定である。	実施計画に基づき、予定どおり進行した。カナダで活躍する文学研究者の視点から日本研究の歴史を振り返り、国境を越えた研究とは何か、文学研究と現在社会はどのように繋がっているのかについて発表いただいた。そして私たちは気候変動、災害、戦争、差別という大きな問題に対して、いかに行動していけば良いか、古典文学、語りと社会の研究からヒントを得ながら、皆でそのアプローチを切り開き考察した。本成果については、国際学研究所のHPに掲載されている。また <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> への掲載に向け、編集が進んでいる。
令和7年度 (2025年度)	2022年に本学では「21世紀アジア太平洋時代の日米関係」と題した国際フォーラムを開催した。世界情勢を見れば、フォーラム後もロシアによるウクライナ侵攻は続き、さらに北朝鮮軍の派遣も報じられている。この世界情勢の変化を踏まえ、国内内外の国際政治の専門家を招きウクライナ戦争と日米韓関係の役割と未来について議論するフォーラムを開催する。こうした議論は学生に大きな知的刺激を与えうると期待される。その成果は、 <i>The Gakushuin Journal of International Studies</i> を通して公開する予定である。	実施計画に基づき、予定どおり進行した。2022年に本学で開催した国際フォーラム「21世紀アジア太平洋時代の日米関係」に続き、深刻化するウクライナ情勢の影響を受けつつ、今後のアジア太平洋地域の安全保障と国際秩序、そして日米協力のあり方はどのように変化するのか、国内内外の有識者と共に議論した。本成果および学生の感想などについては、国際学研究所のHPに掲載されている。
令和8年度 (2026年度)	2022年に本学で開催した国際フォーラム「21世紀アジア太平洋時代の日米関係」では、佐々江賢一郎氏やジョン・ハムレ氏など著名な実務経験者、研究者を招いて多角的な議論を行った。さらに2025年には世界情勢の変化を踏まえて「ウクライナ戦争とアジア太平洋の国際関係」と題するフォーラムを計画し、2022年の議論をフォローアップしてきた。現在、トランプ政権となって日米関係と東アジア国際関係の未来はさらに不確実性が高まっている。このような環境下においてトランプ政権の東アジア戦略を読み解く必要性は増大しており、これまでの議論を土台としつつ、トランプ政権の東アジア戦略を議論するフォーラムを開催する。これは国際系の学問を学ぶ本学の学生に大きな知的刺激を与えうると期待される。	